

# 私の一冊

社会福祉学科 鈴木 俊文 先生

田口ランディ 著 『ひかりのあめふるしま 屋久島』

小鹿図書館 291.97/Ta 19

「『海がみたい』そう言って突然に会社を休む……。このセンチメンタルでクサイ行為を一度でもいいからやってみたかったのだ(本書p14)」。本書はこの一文から始まるのですが、本書のエッセンスを象徴するかのようなこのワンフレーズに、スマホが手放せない現代に、どれくらい想像や共感を得られるでしょうか。私はこのフレーズから現実逃避感や癒しへの期待、またそんな生き方がカッコいいぜ！的なニュアンスに、思わず爆笑して本書を読み始めました。

今回私が紹介する一冊は、田口ランディの『ひかりのあめふるしま 屋久島』です。この本は、屋久島の豊かな自然と、そこに息づく生命のつながりをテーマにしたエッセイ集で、著者自身が体験した屋久島での日々が本当にリアルに、そしてユニークに描かれています。屋久島というと、太古の森や屋久杉、降り注ぐ雨といったダイナミックな自然の風景を想像されると思いますが、本書は屋久島の壮大さだけでなく、足元に広がる苔むした大地や、森に生きる小さな命の「気配」までを丁寧に描いており、屋久島を訪れる人々や島に暮らす人々との触れ合いを、読者自身も疑似的に体感できるような一冊です。

私がこの一冊をみなさんに紹介したいと思った理由は、本書が提供する、自然と触れ合う“体験の描写”が、学習や実習等の記録作成の意義を理解することに大いに参考になると考えたためです。驚いたのは、この本が出版されたのが2001年であるということ。20年以上も前に出版されたこの本から、私は、自然の静謐さに耳を澄ます体験を新鮮なほど得られたし、他者との共感や寄り添い方に対する新たな視点を学ぶこともできました。きっと著者の文章は、自然の美しさを追うだけでなく、それに触れる中で著者自身の心の動きや、人と自然の関わり方を見つめ直す問いが数多く生まれていた(それが読者に伝わった)のだと思います。

デジタル社会である現代は、わからないことはすぐにネットで検索できるし、SNSを通じて多くの人々の体験を共有することができます。そして、AIの誕生は、自身の考えや体験までを超えた文章を生み出します。このようなデジタル社会の中で、本書が描く“触れることでしか得られない気づきや対話の重要性”は、大学生活を送るみなさんの、唯一無二の学習や実習等の経験の意義や意味に、大いに気づかせてくれる一冊になると思います。

本書の魅力は、アルゴリズムによる合理的な分析や効率化にはない文章表現の豊かさにあり、五感を通してでしか得られない唯一無二の体験の力があります。ぜひ体感してください。